

研究課題 (テーマ)		新生児蘇生法 (NCPR) 実施における看護師の視認機能の特徴		
研究者	所属学科等	職	氏名	
代表者	看護学部 母性看護学	講師	小林 絵里子	
分担者	看護学部 母性看護学	教授	松井 弘美	
	看護学部 母性看護学	講師	村田 美代子	
	看護学部 母性看護学	助教	北島 友香	
	国際医療福祉大学塩谷病院 小児科 副部長	医師	嶋岡 鋼	
	工学部電子・情報工学科	教授	唐山 英明	
	工学部電子・情報工学科	講師	木下 史也	
研究結果の概要				
<p>1. 研究協力者の背景</p> <p>協力者はアドバンス助産師 5 名で、全員が NCPR 専門 (A) コースを受講していた。経験年数は 13 (8-17) 年、初期処置以上の NCPR 実施回数は平均で 10.8 (1-30) 回/年と幅があった。</p> <p>人工換気実施後の自己評価は、①肩枕を使用しスニッフingポジションをとる (気道開通を確認する) ②IC クランプ法でマスクと児の下顎を保持する③マスクを顔に密着させる④40～60 回/分で人工呼吸を行う⑤胸郭の動きを確認する、の 5 項目のうち、④と②の点数が低かった。</p> <p>2. 人工換気実施中の視点の変化</p> <p>5 名分の視線計測結果は、おおむね頭から足元に向けた一直線となる視線移動がみられ、口元のみ視点に固定することはなかった。アルゴリズムでは、30 秒間の換気の際に次の段階に進むか否かの判断が必要であり、そのための情報収集や、全身状態の把握を行っている可能性も考えられた。</p> <p>本研究は新生児モデルを用いたシミュレーションラーニングを効果的に行うためにも臨床での看護師の経験値を共有する方法検討の基礎データになることが考えられた。周産期医療に携わる専門職者が教育を受け、個々の対処能力が向上することで新生児の救命率の上昇や、予後の改善につなげることが可能となる。現実に蘇生が必要な場面に直面しても、効果的なシミュレーション経験があれば、落ち着いて対処することが可能となり、看護行為に対する認知面を含めた教育となると考えられ、このことが今後この研究を継続して行う意義である。</p>				
今後の展開				
<p>研究協力者数が 5 名と少なく、一般化するにはさらなるデータの測定及び、蓄積が必要である。また、今回は対象者を熟練者としたため、今後は初学者のデータとの比較を行う必要がある。今後はさらなるデータの収集と、初学者や、他職種の視線データとの比較を行い、差異を明らかにし、シミュレーションの有効性につなげることが必要である。</p>				